

飛鳥高探偵小説選Ⅳ  
目次

青いリボンの誘惑

1

\*

加多英二の死

160

去り行く女

179

金魚の裏切り

192

古傷

211

総合手配

229

栄 養

.....

272

傷なんか消せるさ

.....

276

吹雪の女

.....

347

さらば祖国よ

.....

365

【著者解題】

.....

383

## 凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」（昭和六一年七月一日内閣告示第一号）にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

## 青いリボンの誘惑

### プロローグ

地下鉄の階段を昇って外へ出ると、目の前に信号があつて、十人ばかりの人が車道に向つて立っていた。

三谷裕は、縞しまの半袖シャツを着た白人の横に並んだ。

二人共、ほかの者より頭ひとつ高い。二車線の車道の向う側で、こちらを向いて待っている群の中の、若い女が、二人に視線を投げてどちらが高いか見比べていた。

信号が青に変わった。

裕はゆっくりと歩く。雨は降っていないが、空は鈍い色の雲に覆われていた。梅雨はまだ明けていないのだ。空気は湿つてうつつとうしい。裕の顔にも、そのデニムのスボンの中にも、その空気が貼りついていてた。

この前にこの道を歩いたのは、もう三週間も前だ。母

親から、父の健三が再入院したという知らせを受けてからすぐだった。母親はおろおろしていた。一年前胃の手術をして、また入院ということになれば、あまりいいことではない。

母は、裕が家にいてくれないことを嘆いた。他へ嫁いでいる妹もそれを言う。しかし父と絶縁したつもりでいる裕に帰る気はない。

それにもかかわらず、父が再入院したあとは、その病気がことが頭から離れないでいるのだ。

病院の玄関に入る。

連れ立って見舞に来たらしい数人の人達とすれ違う。女達は低い声で話を交していた。

正面の広いカウンターの上には、へ本日の受付けは終了しました」というプレートが出てある。その横で、白い上衣を着た女が二人カウンターを挟んで、話をしていた。

外来の広い待合室には、誰も座っていない茶色の長椅子が、四列に並んでいる。裕はその前を、病室へ導く白い線に沿って、大股にゆっくり進んだ。

えんじ色の大型のエレベータードアの前で、数人の人が待つていた。見舞客に病院の従業員も混っている。両方の眼の光に違いがある。自分はどんな眼をしているの

だろうと裕は考えた。

（乗り降りには患者さん優先にして下さい）というプレートを貼ったドアが開いた。

エレベーターを降りるとすぐナースステーションがある。入口の近くにいた中年の看護婦に、裕は声をかけた。

「三谷ですが――」

看護婦がこつちを向く。裕を憶えているかどうかは分からない。

「――どんな具合でしょう」

看護婦の顔に職業的笑みが浮ぶ。職業的であっても、浮ばないよりずっと増した。

「お元気ですよ」

「また手術ですか」

看護婦はちよつと首を傾げた。

「――多分」

「有難う」

「――あの――」

裕が行きかけると看護婦の声が追った。

「――えっ？」

「お元気ですけどね。時々うなされているのか、ひとりごと独言を言ってるのさ――」

「どんない」とっ」

「よく分りません。一度、青いリボンと聞えたことがあります。退屈なので独言を言ってるのさ、知れませんがと思ひまして」

看護婦の眼はヴェテランらしい光を帯びていた。病室の間を進む。

どこも綺麗に掃除されている。汚れている所はない。しかし周囲の白い壁は、長い間の人々の恨みと嘆きを吸い取って、重く曇っていた。

三谷健三と名札の下った個室のドアを叩き、静かに開ける。

健三はベッドに寝て足元の方にあるテレビを見ていた。白い短い髭が口の回りに光っていた。血色はそんなに悪くはない。

「――おお」

と短い声を出した。そしてリモートスイッチをテレビへ向けた。十手を持ったちよん鬚の男と共に画面が消えた。

「食事はとれるの？」

と裕はベッドの横の椅子に座った。

「うん。まあまあ」

柔らかな低い声だ。

家の中で、常にボスであった、いや、あろうとし続けている男の声とは違っている。目の前に座っているのが、自分に背いて家を出て行った息子であることは忘れようとしているかのようだ。

そういう父親の心理がこちらの心に反射して、こちらも芝居がかった態度になろうとするのを、裕は感じていた。それで彼は事務的な話し方を選んだ。

「かあさんの電話だと、何か用事があるという風だったけど」

健三は、黙って息子の顔を見ていた。そして、

「うん」

と頷いた。

「お前、今何してる」

「デパートの配送所で働いてる」

「なぜ、そんな事を——」

「半年ばかり、コンピュータソフトのアルバイトをやっていたけれど、あまり部屋の中にはかりいたのでね、少し肉体労働がしたくなったんだ。今中元で忙しくて、いい稼ぎになるよ」

「相変らずだな」

健三の顔に、家族に君臨していた時の表情が少し戻った。

彼は今、住宅メーカーの社長である。その会社は、十数年前、妻の父が一代で興した建材店を引き継いだもので、それを住宅産業に転換させ、時代の勢にも乗ったが、健三の努力で、住宅メーカーの大手の一角に食い込ませたのである。

健三は養子にはならなかったし、義父の威光にも負けまいとした。その態度が家庭の中にも及んだ。そして彼は当然裕が、家業を継ぐものと考えていた。

裕は大学を卒業すると家を出た。

その後定職についていない。いつか健三がそれを咎めるとき、裕はこう答えた。

「おれは、現代の狩猟採集の民だな。山野の代りに都会を縄張りにし、獣や木の実の代りに金を取るけど、必要とき、必要なだけ働くことは同じだよ」

「気取りやがって。今に後悔するぞ」

と健三は言った。

健三は暫く天井を見ていた。

「それじゃ、稼ぎになればおれのためにでも働くか」

低い思いつめたような声であった。息苦しいのかも知れない。

「なんだい」

「ちょっと調べてもらいたいものがある。調べるとい

うより、見てきてもらいたいんだ」

「なにを」

健三は、裕の方へ目を向けた。

「おれがこの会社の仕事につく前に、設計事務所において、化学工場を造るために長野の加莊市に行つてたことがある」

「ああ憶えているよ。一度かあさんと遊びに行つたことがある」

「うむ。おれは間もなくそつちを辞めて、この会社へ入つたが、あとに阿東君というのが残つて苦労した。その所為か、彼は工場が出来上つた頃、心臓を悪くして死んでしまった。あとに家族が残っている。それがどんな風に暮しているか気になつている」

「それを見てくるのか」

健三は、ベッドの頭の方にある台に手を伸して一冊の月刊誌を取つた。そのページを繰ると一枚の紙片を引き出した。

「この前、長野の営業所の人に調べてもらった。ここにいるらしい」

裕は紙片を受けとつた。

阿東美津子という名の横に加莊市の住所と電話番号が書いてあつた。集合住宅のようであつた。

「電話するか、営業所の人に行つてもらつたらいいじゃないか」

「他人では話ができない。電話では——何も分らん」

健三の声に、何かためらいの響きがあつた。

「いいよ。ちよつと旅するのもいい」

「それから——」

「まだあるのか」

「あの当時、野坂組という土建屋があつて、工場の仕事をしてもらつた。ある時大雨が降つて、工事中の裏の山が崩れ、現場に来ていた野坂の息子が死んだ」

健三は暫く言葉を止めた。長く話すのが辛いのかも知れない。

「——夜だつた。川に流されて。その息子にも妻子があつた。それがどうしてるか」

裕は黙つて頷いた。

父は、自分の死期を考えているのかも知れない。そして昔、自分の仕事に關つていた者の死が、心に甦つてきたのだ。それがどの位の重さなのか。少くとも不仲な息子に頼む程度の重みはあるのであろう。

「それだけか」

「うむ」

「今の仕事のきりがついたら行つてくる」

裕はちよつと父の顔を見ていてから尋ねた。

「このこと、かあさんは知っているのか」

健三はすぐには答えなかった。そして

「どうでもいい」

と言った。

「それから、青いリボンというのは、このことと何か関係あるのかい」

上を向いた健三の眼は動かない。裕は、健三が自制心の強い人間であることを知っている。その心を読むのは、時として難しい。二人が不仲になった原因のひとつには、それがあるかも知れない。

「何の話だ」

と健三は呟いた。

裕はその顔を見ながら、強いて柔らかい調子で言った。「ともかく、行ってくるよ。あそこの大学にはテニス部の先輩が行ってるはずだから、そいつにも会ってみたい」

健三は、裕の方に眼を向けて弱い笑みを浮べた。

「日当はいくらだ」

多分それは照れ隠しなのだろう。

## 第一章 殺人事件

### 1

コンクリートの舗装の上を、白黒に塗り分けられた幼児用のサッカーボールが、擦るような音を立てて転がって行つた。

舗装には太い割れ目が走っている。その割れ目には、セイヨウタンポポ、イヌフグリ、ヨモギなどの雑草が、梅雨の合間の朝日を受けて並んで生えていた。

そこは、数年前操業を止めた、小さな化学工場の門前の広場である。十メートルばかりの幅の道路と、同じ位の幅の川に挟まれた角に当たっている。

そしてその辺りは、加莊市のある盆地の東端に近く、川はすぐ北側の、植林された杉と雑木林ざつぼくしんに覆われた山から流れ下っているのだ。雑木林の新緑は、悲しいほどに鮮やかで美しかった。

川の向うに遠く、加莊市の中心部が見える。コンクリ

## 栄養

1

延原は、視線を酒巻女史の顔から、風景画のかかつている黒っぽい壁の面へ流した。

——なんていやらしいほどいい血色をしてるんだらう。もう五十近いばあだというのに。たしかに以前はこうじゃなかった。

月刊誌〈モダンレディ〉の編集部では、酒巻女史が、同誌の身上相談担当を شدした二年前から、明らかに彼女の健康状態は良くなっているということが定説になっていた。

女史は、もともと男のように大柄で頑丈な体軀たいくをしていた。そして容貌も女としては、あまりふさわしくないものだった。かさかさとした干からびた皮膚と陰険な眼差まなざし

とは、その意地悪な毒舌とともに、社会評論家酒巻女史の特徴となっていた。毒舌の方は相変らずであったが、少なくとも皮膚の色艶は見違えるように良くなった。それに最初に気が付いたのは、勿論担当の延原であった。

「ピンク色してやがるぜ。まるで若い女みたいにさ——」と彼は同僚に話した。

「なぜだろう」

「たぶん、毎月全国から来る不幸な女性達の手紙がそうさせたんじゃないかな」

と同僚は答えた。

「どうして」

「他人の不幸ってものはさ、大体精神衛生上いいもんだ。——特に女史にとって同性の不幸はね」

——あるいはそうかも知れない。

延原はもう一度視線を女史の方へ戻した。黒いレースのワンピースを着た女史は、その大きい体を肘掛椅子ひじかけいすにゆったりと埋めて、延原が持つて来た、今月分の不幸な手紙の束を一つ一つ眺めていた。

女史は、編集部で適当なものを選定することを許さず、全部の手紙を持つて来るように要求していた。

女史は十五年前に夫を亡くしてから、戦前の財界の大

御所であった父の残した、豪壮な邸宅の中にたった一人で住んでいる。庭仕事や家事のために、パートタイムで人を入れるが、住込みはさせない。ここは彼女一人の城なのだ。

その城の中で、深夜彼女はゆっくりと、不幸な手紙を咀嚼そじくしているのだろう。そしてそれが彼女の血を一層赤くする榮養になっているに違いないと、延原は想像した。

「お陰で、最近ますます反響が大きいようですね」と延原は言った。

女史はちよつと目を上げると、満足げな、あるいは馬鹿にしたような微笑を浮べた。

「多分。先生の痛烈で容赦のない論調が読者の共感を呼ぶんでしょね」

「しかしわたしの議論は少し極論に過ぎて、実行可能な点もあるんじゃないやありませんか」

「それは確かにありますね。しかしわれわれとしては、投書した一人を救うより、それを読む十万人に楽しませる方が好ましいことですからね」

「おや——」

女史は手紙をめくっている手を止めた。

「この石上朝子というのは、たしかいつか取上げた覚えがあるわ」

「ああそれね。それは大変珍しい手紙ですよ。半年前に掲載したのですが、その時の先生の指導通りにやって、今大変幸福になったというのですよ。それはお礼状なんですよ」

女史は口をとがらせて頭を振りながら、中の便箋びんせんを取出した。

「どんな話でしたっけ」

「あれは極く月並な問題でしたね。夫は不在勝ちで浮気してるらしい、家には意地の悪い姑しゅうとめがいる。自分は未だ若いけれど、このまま一生を終わりたいものだろうかというやつですね。それに対する先生の回答は、一刻も早く離婚して、新しい伴侶はんごを得よ、ということでした。自由恋愛を男の特権のように思っている女自身の偏見を叩き潰せというご意見でしたね。つまり女も大いにその権利を行使しろということじゃなかったですか」

女史は、手紙を読んでいたが、そのうち声に出した。「……とうとう私は夫との協議離婚に成功いたしました。そして今では、私の幼友達で若いテレビタレントとして勉強中の白井啓介との恋愛が進行中なのです。」

今の私は朝日のような希望の光に向き合っております。これもみな、あの時の先生のお励ましがあったからこそできたことなのです。先生は私の半生の親であることも

に、また女性に対する予言者であると思います。

白井は、まだこれからの人間ですが、二人で一生懸命やっけて行くつもりですから、彼のこともよろしくお願いいたします——」

「ねえ延原さん、その白井さんってタレント知ってるの？」

「僕は知りませんがね、いるそうですね、まだ駆出しらしいですが、なかなかハンサムな男だそうですねよ」

女史は、手紙をテーブルの上に置くと、片手で頬を押えた。彼女はそうして暫く、真剣な表情で何か考え込んでいた。やがて彼女はひどく粘っこい口調で言った。

「ねえ、延原さん。あなたどう思う。わたしの睨んだところでは、朝子は前から白井と関係があったんじゃないかしら。それは、彼女の夫は確かに浮気をしていたかも知れないし、姑も意地悪だったかも知れないけれど、同時に朝子も幼馴染おきななつきの白井といささかの関係があったのだと思うわ。そして離婚して白井と一緒にいたいという欲望を正当化し、かつそれに踏切る勇気を得るために、身上相談を利用したのよ」

「なるほどねえ、面白い見方だな、そういうこともあり得るな」

延原は顔をほころばせたが、ふと、女史の妙にギラギラした茶色の目に出合つて、急いで視線をそらした。

「きつとそうよ」

女史は熱っぽく言った。

「しかしまあそれもいいじゃないですか。十万の読者にはたとえ物足りなくても、本人は救われたという、身上相談本来の目的は達したわけですからね。まあ、非常にまれなケースかも知れませんが」

「そうよ。非常にまれなケースよ。あり得ない位ね」  
女史は大きく頷いた。

## 2

数日後、延原が酒巻邸の玄関のチャイムを鳴らした時、酒巻女史はソファアに坐つてゆっくり朝刊を読んでいた。そこには次のような記事が出ていた。

『……昨夜九時頃、明治神宮外苑絵画館前の路上に男の絞殺死体があるのを通りがかりの人が発見して警察に届け出た。調べでは殺されたのはテレビタレント白井啓介氏（二四）で、同氏は同夜六時頃近くの××プロダクションの事務所を出たまま行方不明となり、予定されて

いたNSSテレビのリハーサルにも姿を見せず心配されていたものである。解剖の結果、胃の中に睡眠薬が発見されたので同氏は何者かに睡眠薬を飲まれた上、絞殺され、車で現場へ運び遺棄されたものと見られている。

白井氏は女性関係にいろいろ噂もあり、警察ではその方面に関係があるのではないかという見方を深めている――

女史は、その新聞を置いて椅子から立った。延原を迎えた女史の顔は、ことの外いきいきと輝いていた。

「できましたか」

延原はタバコに火をつけてからたずねた。

「出来たわ。今月は、母親の姦通を知った娘の悩みと  
いうのをとりあげてみたわ。わたしの見るところではこの娘は既に少しグレ出してるのよ。それを正当化するために母親の姦通を持出したんだわ。それを徹底的に叩いてやったわ」

女史は、カーテンで仕切られているキッチンセットの所へ行って、茶の用意を始めた。紅茶を二つ入れ、ウイスキーを少し加えた。台の上に睡眠薬の入った瓶が出ていた。女史は口をとがらして頭をふると、瓶を戸棚へ入れ静かに戸を閉めた。

女史は盆を持ってカーテンを開けた。

「ねえ、あなた方は身上相談を持ちこんだ人達のその後について調査してる？」

「いや、そこまで手は回りませんよ」

「無責任ね」

女史は、テーブルにコップを置くと、ゆったりと椅子に腰を下した。それから、つくづくと若い延原の顔を見つめた。

「ねえ、今度箱根へでもドライブしない？」

延原はビックリしたように、コップを口からはなした。

「わたしも最近、運転にすっかり自信を得たのよ。ほんとうよ。それに若い男を傍に乗せて運転するなんてほんとに楽しいものよ。母性本能を満足させてくれてね」

延原は女史の太い腕を眺めた。

――多分、運転は大丈夫だろう。

しかし彼は、若い女のように栄養のいい女史の頬の色を見て、何となく身ぶるいを感じた。

## 著者解題

公表された作品について、作者として今更何もういこととはありませんが、昔書いたものを読み返してみると、当時の世の中のこととか、自分のことについて、いろいろと思いつくことがあります。それを書いてみようと思いません。

「青いリボンの誘惑」（新芸術社『青いリボンの誘惑』書下ろし、平成二年六月）

太平洋戦争中特攻隊員であった人が、たまたま生き残って、自分だけ生き残ったことに自責の念を感じるといふ話を聞くことがあります。私は特攻隊員ではありませんでしたが、太平洋戦争の生き残りです（論創社『飛鳥高探偵小説選Ⅲ』収録「歳月の墓標」参照）。それでも私にもそれがあるのです。さすがに最近はだいたい薄れましたが。

戦場で死ぬか生きるかは、全くの偶然によるもので、当人には何の責任もありません。どうも不思議な感情です。

この作品は戦争とは関係ありませんが、国の発展と共に自分だけいい思いをしているというような自責の念がベースにあったような気がします。

物語の場所は長野県の東の方です。妻もそちらの方の出身なので、夏なんかよく行きました。妻の友達の果樹園を訪ねたり、塩名田しおなだという所にある川魚料理を食べさせる古い店にもよく行きました。店の傍を千曲川が流れておりました。土地勘があるので、話の場所をこの辺りにしました。

「加多英二の死」（『宝石』昭和二十七年二月号）

私は、小学生の頃お寺で暮しておりました。漁師部落のせいかな、信仰の篤い所で、寺に居た二、三人の坊さん達は忙しく働いておりました。毎日寺でのお勤めが済むと、過去帳に記載されているその日その日の数名の故人の宅を手分けして訪ねて行っておりました。

そうなる寺は信仰の場と言うより、仕事場です。過去帳に記されている死者は仕事相手であり、そこに人格を感じます。親近感もあります。加多英二もその一人でしょう。

#### 「去り行く女」〔探偵実話〕昭和三十二年六月号

この頃は、戦後十二年経って、生活の方は少し落ち着きました。食べ物を探して闇市をうろついたり、休みの日に買い出しに行ったりしなくて済むようになりました。

その代り政治の方は騒がしくなりました。ソ連が世界初の人工衛星を打ち上げたのはこの年で、所謂東西対立が顕著になり、国内的にも岸内閣が成立し、日米安保問題が騒がしくなりました。

この頃言われるようになった言葉に（戦後強くなったのは靴下と女）というのがあります。靴下の方は化学繊維が使われるようになったからですが、女性の方も自主性を使い慣れて来たからでしょう。この作品にも頼りな

い男と、自分の事は自分できめる女性が出てきます。

#### 「金魚の裏切り」〔宝石〕昭和三十四年六月号

昭和三十四年といえば、今の天皇皇后の御成婚パレードが、華やかにテレビ放送された年で、世の中は所謂高度経済成長期の中でした。

私は、生コンクリート業で働いておりましたが、ひどく忙しくて、除夜の鐘の音を工事現場で聞いた覚えもあります。

夜間の工事というと、頭に残っていることがあります。

有楽町駅近くのビル建設現場でした。私は生コン車で運ばれてくるコンクリートのサンプルを採る仕事をしておりました。ふと気が付くと、近くのビルの玄関の暗がりの中に、白っぽい服を着て立っている女性の姿がありました。駅の近くといいながら、街は暗いのです。

何者かすぐ分ります。もう占領期は過ぎていた頃でしたが、米兵がパンパンと呼んでいた売春婦です。気になるものだから時々目をやるのですが、随分と長い間立ち尽していました。

その内姿が消えました。客に拾われたのか、今夜は諦めて帰ったのか、分りませんが彼女の去った暗がりの中には、戦争に負けた国の恨みと悲しみがいっぱい詰って

[著者] 飛鳥 高 (あすか・たかし)

1921年、山口県生まれ。本名・鳥田専右 (からすだ・せんすけ)。東京帝国大学工業学部卒業。工学博士。1946年、『寶石』懸賞探偵小説「犯罪の場」を投じて入選、翌年、同誌に掲載されデビュー。短編と並行して『死を運ぶトラック』(59)や『死にぞこない』(60)などの書下ろし長編を精力的に発表、62年に長編「細い赤い糸」で第15回日本探偵作家クラブ賞長編賞を受賞する。75年にコンクリート工学の研究で日本建築学会賞受賞後、本業多忙のため短編「とられた鏡」(76)を最後に断筆状態が続いたが、1990年、旧友が出版社を立ち上げた記念に長編「青いリボンの誘惑」を書き下ろし、久々に新作を発表した。

あすかたかしたんていしょうせつせん  
飛鳥高探偵小説選Ⅳ

[論創ミステリ叢書 114]

2018年6月20日 初版第1刷印刷

2018年6月30日 初版第1刷発行

著者 飛鳥 高

装訂 栗原裕孝

発行人 森下紀夫

発行所 論創社

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-23 北井ビル

電話 03-3264-5254 振替口座 00160-1-155266

<http://www.ronso.co.jp/>

印刷・製本 中央精版印刷

©2018 Takashi Asuka, Printed in Japan

ISBN978-4-8460-1719-4